

2025年度 山梨学院大学 卒業時調査報告書

2026年4月29日

学事課IR担当：潘秋静

副学長：倉澤一孝

1. 調査目的

山梨学院大学は、教育の質的転換を重視する大学として、学生に対して充実した教育を実施することを重要な使命としている。大学教育の質を保証するためには、計画（PLAN）、実施（DO）、評価(CHECK)、改善(ACTION)を繰り返す、PDCAサイクルを有効に機能させることが重要である。

「卒業時調査」は、このPDCAサイクルの中で評価（CHECK）の機能として、学位記授与式において、卒業生を対象に、大学での学修を振り返ってもらうことで、本学が定めた学位授与の方針（Diploma Policy: DP）の達成度を卒業生自身に評価してもらうものである。卒業生の学修成果を把握するとともに、本学の教育活動の有用性やDPに基づく内部質保証の効果について学生から評価を求めることによって、エビデンスに基づき今後の施策を検討することを目的としてこの調査を実施した。

2. 調査期間

2026年3月15日 学位記授与式

3. 調査方法

Microsoft formsを使用し実施

4. 調査項目

第1部 卒業後の進路について

第2部 大学の学習環境や教育サービスに関する評価

第3部 身につけるべき能力・技能・資質（DPの達成度）に関する評価

第4部 大学学習全体の有用性について

第5部 本学の総合評価について

5. 調査対象

- ✓ 調査対象:全学部卒業生 919名
- ✓ 回答者数:745
- ✓ 回答率: 81.1%
- ✓ 有効回答者の構成比率

	法学部	経営学部	健康栄 養学部	国際リベラルア ーツ学部(iCLA)	スポーツ科 学部	全体
対象者	313	320	48	14	224	919
回答数	230	257	46	12	200	745
未回答 数	83	63	2	2	24	174
回答率	73.5%	80.3%	95.8%	85.7%	89.3%	81.1%

6. 調査結果

3ページから18ページの内容を参照して下さい。

第 1 部 卒業後の進路について

- 全学部

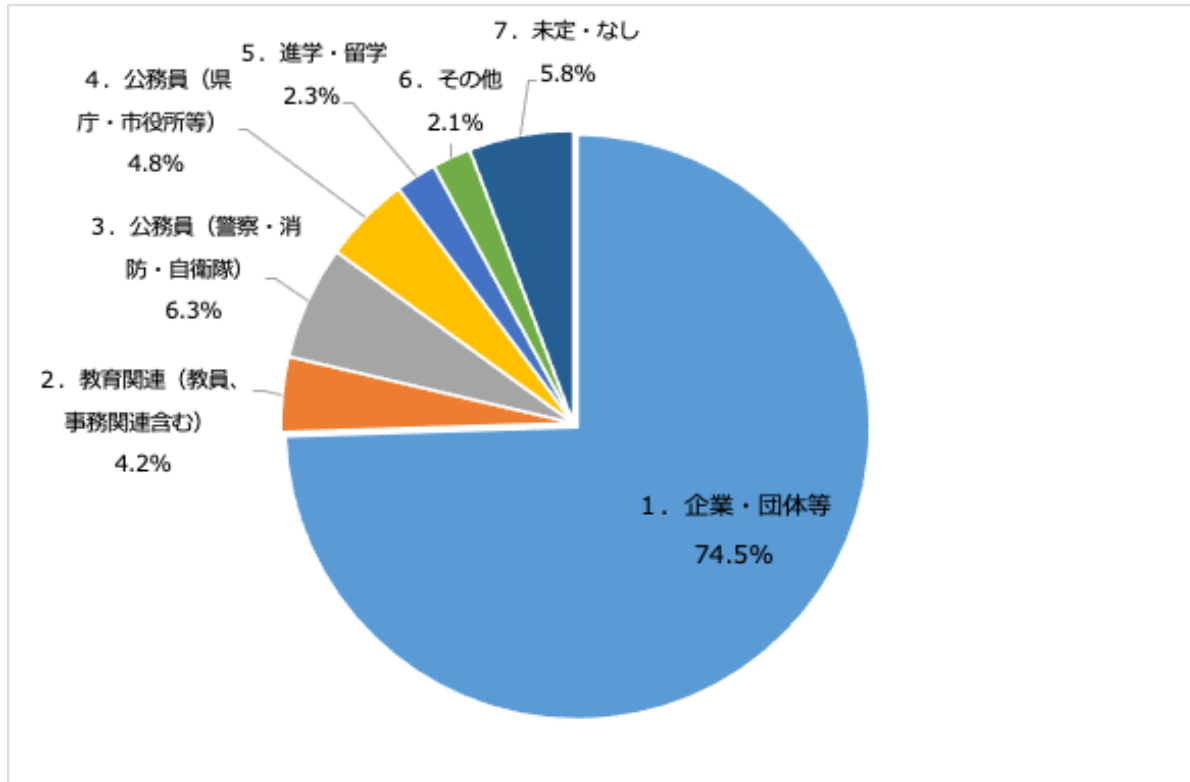
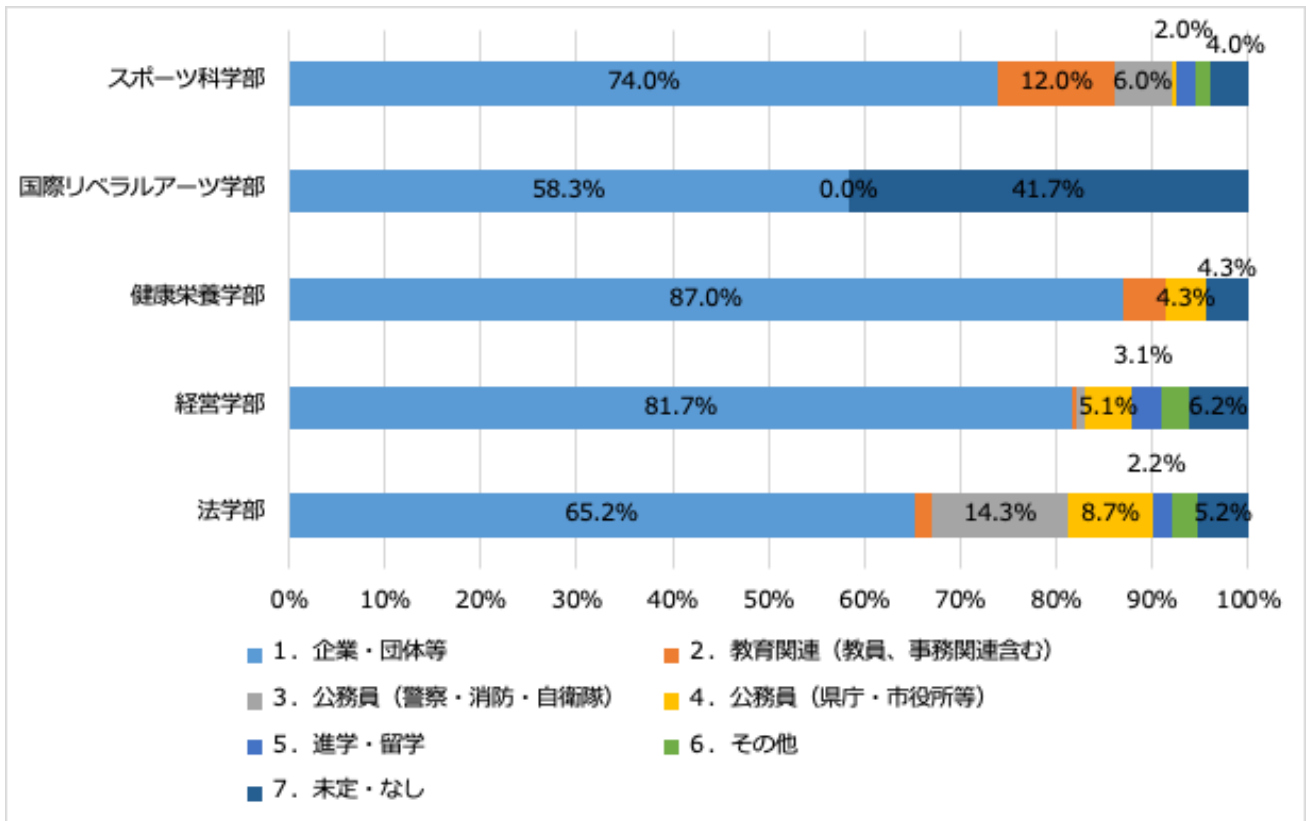


図 1 卒業後の進路について（全体）

図 1 は、「大学卒業後の進路」について示した円グラフである。全体として、2024 年度と同様の傾向が見られた。「企業」への就職が 74.5%と最も多く、次いで「公務員」が 11.1%、「教育関連」が 4.2%、「進学・留学」が 2.3%、「その他」が 2.1%であった。また、「未定・なし」は全体の 5.8%を占めている。

これらの結果から、多くの学生が民間企業への就職を志向している一方で、公的機関や教育関連分野、さらに進学・留学といった多様な進路選択も一定程度存在することが確認された。なお、「未定・なし」の割合は昨年度より 4 ポイント減少しており、過去の課題を踏まえた就職支援体制の充実が、その一因となっている可能性が示唆される。

- 学部別に見た卒業生の進路（図 2 参照）



注：カイ2乗検定 $p < .001$

図2 卒業後の希望(決めた)進路について (学部別)

学部別で見ると、卒業後の進路には学部間で明確な差が見られる。

まず、「企業・団体等」と回答した卒業生の割合は、健康栄養学部が最も高く87.0%となっている。次いで経営学部が81.7%、スポーツ科学部が74.0%、法学部が65.2%、国際リベラルアーツ学部が58.3%と続いており、最大で28.7ポイントの差が見られる。特に健康栄養学部および経営学部では、企業就職志向が強い傾向が顕著である。

次に、「公務員」に注目すると、法学部が最も高く、警察・消防・自衛隊が14.3%、県庁・市役所等が8.7%と、合計で23.0%を占めている。他学部と比較しても際立って高く、法学部における公務員志向の強さが明確に表れている。これは、公務員試験対策を重視したカリキュラムや支援体制の充実が影響していると考えられる。

一方、教育関連 (教員・事務等) ではスポーツ科学部が12.0%と最も高く、他学部と比較して顕著な特徴が見られる。また、健康栄養学部においても4.3%と一定の割合が確認される。

さらに、「進学・留学」の割合を見ると、経営学部が3.1%と相対的に高く、次いで法学部（2.2%）、スポーツ科学部（2.0%）となっている。一方で、健康栄養学部および国際リベラルアーツ学部では進学・留学の割合は見られなかった。国際リベラルアーツ学部では、「企業・団体等」が58.3%にとどまり、他の進路区分がすべて0%となっている点が特徴的である。この背景として、留学生の割合が高く、卒業後に帰国するケースや進路把握の方法の違いにより、進路が十分に反映されていない可能性が考えられる。

以上より、2025年においても、学部ごとに進路構造の特徴が明確に分かれており、法学部は公務員志向型、健康栄養学部および経営学部は企業就職型、スポーツ科学部は教育関連志向を含む多様型といった傾向が確認された。各学部の教育内容やキャリア支援の方向性が、進路選択に影響していることが示唆される。

第 2 部 大学の学習環境や教育サービスに関する評価

以下の 6 つの観点から大学での学習環境や教育サービスに対する評価を尋ねたところ、「4.ある程度当てはまる」「5.とても当てはまる」の割合でランク付けすると以下の通りとなった。

表 1 大学の学習環境や教育サービスに関する評価

	割合	2025 年 順位	2024 年 順位
素敵な先生に出会うことができた。	76.5%	第1位	第2位
少人数・ゼミ形式の授業で学びを深められた。	73.5%	第2位	第1位
生活・学習・経済・就職等の学生支援が充実していた。	73.3%	第2位	第4位
キャンパスの施設は学習環境としてよかった。	71.6%	第3位	第3位
大人数の講義形式の授業で学びを深められた。	71.2%	第4位	第5位
部活やサークル活動及び国際交流等の課外活動が充実していた。	68.3%	第5位	第6位

2022年度、2023年度、2024年度と同様に、本学の教育サービスに対する卒業生の評価から、「学生と教員との繋がり」が最も評価されていると分かった。

さらに、「少人数・ゼミ形式の授業で学びを深められた」および「部活やサークル活動、国際交流等の課外活動が充実していた」という項目については、学部ごとに評価の差がより見られた。

まず、「少人数・ゼミ形式の授業」に関して、「ある程度当てはまる・とても当てはまる」と回答した割合を見ると、スポーツ科学部が91.0%と最も高く、次いで健康栄養学部が82.6%、経営学部が67.7%、法学部が63.0%となっている。一方、iCLAは66.6%であるが、「やや当てはまる」の割合も33.3%と相対的に高く、評価がやや分散している傾向が見られる。特にスポーツ科学部および健康栄養学部では、少人数教育の効果が強く実感されていることがうかがえる。

次に、「課外活動の充実」に関しては、「ある程度当てはまる・とても当てはまる」の割合がスポーツ科学部で85.0%と最も高く、他学部と比較して際立っている。次いで法学部が66.5%、経営学部が60.3%、健康栄養学部が58.7%となっている。一方、iCLAは33.4%にとどまり、「あまり当てはまらない」の割合が41.7%と高い点が特徴的である。

以上より、スポーツ科学部では、少人数教育と課外活動の双方において高い評価が得られており、教育・学生生活の両面で満足度が高いことが示唆される。一方、iCLAでは課外活動に対する評価が相対的に低く、学修環境や学生支援の在り方について再検討の余地があると考えられる。また、他学部においても、課外活動の充実度には一定の差が見られることから、学部特性に応じた支援の充実が求められる。

第3部 身につけるべき能力・技能・資質（DPの達成度）に関する評価

学生に何を教えたかよりも、学生が大学4年間でどれだけ知識・技能・資質を修得し成長したかが重要であり、学生本位の教育が求められている。卒業生がディプロマ・ポリシー（DP）に対し、どのくらい達成したと考えているかを測定するため、本学のDPに基づき設問を設けた（図3参照）。

(1) 全体から見たディプロマ・ポリシー全学共通（DP）の達成度

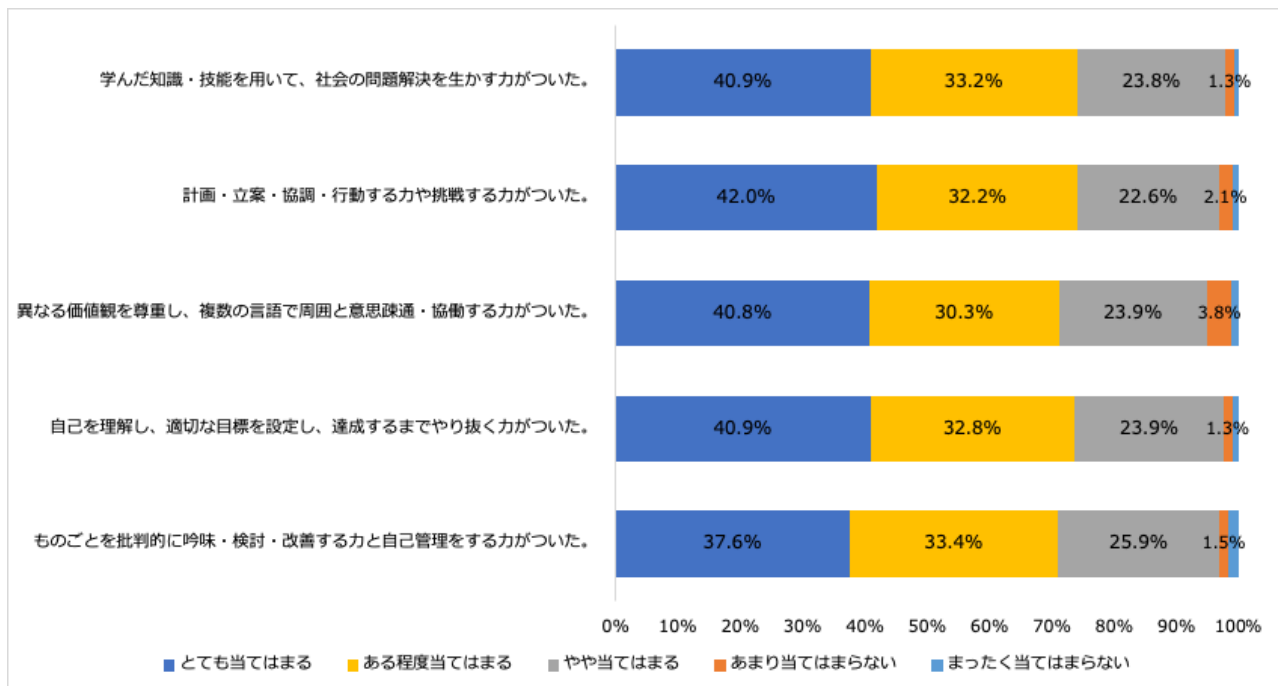


図3 身につけるべき資質・能力（DPの達成度）に関する卒業生自己評価

全体から見たディプロマ・ポリシー全学共通（DP）の達成度について、2025年の結果をみると、「当てはまる」「やや当てはまる」との回答を合算した割合はいずれの項目においても高い水準を維持している。

具体的には、「計画・立案・協調・行動する力や挑戦する力がついた」が74.2%で最も高く、次いで「学んだ知識・技能を用いて、社会の問題解決に生かす力がついた」（74.1%）、「自己を理解し、適切な目標を設定し、達成するまでやり抜く力がついた」（73.7%）、「ものごとを批判的に吟味・検討・改善する力と自己管理をする力がついた」（71.0%）、「異なる価値観を尊重し、複数の言語で周囲と意思疎通・協働する力がついた」（71.1%）の順となっている。

2024年度と同様に、全ての項目において約7割の卒業生が肯定的に評価しており、本学におけるディプロマ・ポリシーの達成状況は全体として安定的に維持されていると考えられる。

(2) 学部別見たディプロマ・ポリシー（DP）の達成度

全学共通のディプロマ・ポリシー（DP）の達成度について、学部間の違いを明らかにするために分析を行った。この分析には一元配置分散分析を用い、有意差が見られた場合には

Scheffe法による多重比較を実施した。分析の結果は表2にまとめられている。

表2 学部別DPの達成度に関する一元配置分散分析

	全体	法学部		経営学部		健康栄養学部		国際リベラル アーツ学部		スポーツ科 学部		F/p	多重比較
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD			
ものごとを批判的に吟味・検討・改善する力と自己管理をする力がついた。	4.04	3.96	0.97	3.93	0.94	4.13	0.83	3.92	0.79	4.25	0.81	4.16	ス>法・経
自己を理解し、適切な目標を設定し、達成するまでやり抜く力がついた。	4.11	4.03	0.93	4.04	0.92	4.26	0.71	3.58	1.24	4.30	0.76	4.70	ス>法・経
異なる価値観を尊重し、複数の言語で周囲と意思疎通・協働する力がついた。	4.06	4.01	0.97	3.97	0.99	3.98	1.04	4.00	1.13	4.25	0.83	2.88	ス>経
計画・立案・協調・行動する力や挑戦する力	4.12	4.01	1.00	4.04	0.92	4.20	0.78	3.58	0.90	4.36	0.73	6.19	ス>法・経
学んだ知識・技能を用いて、社会の問題解決を生かす力がついた。	4.12	4.01	0.91	4.06	0.88	4.28	0.75	3.58	1.00	4.32	0.78	5.49	ス>法・経

有意水準 5%以下は統計的に有意な差と検証される。

まず、「ものごとを批判的に吟味・検討・改善する力と自己管理をする力がついた」において、スポーツ科学部 (M=4.25) は法学部 (M=3.96) および経営学部 (M=3.93) を有意に上回っている。また、「自己を理解し、適切な目標を設定し、達成するまでやり抜く力がついた」でも、スポーツ科学部 (M=4.30) が法学部 (M=4.03) および経営学部 (M=4.04) を上回っている。

さらに、「計画・立案・協調・行動する力や挑戦する力がついた」(スポーツ科学部 M=4.36) および「学んだ知識・技能を用いて、社会の問題解決を生かす力がついた」(スポーツ科学部 M=4.32) においても、いずれもスポーツ科学部が法学部および経営学部を有意に上回る結果となっている。加えて、「異なる価値観を尊重し、複数の言語で周囲と意思疎通・協働する力がついた」についても、スポーツ科学部 (M=4.25) が経営学部 (M=3.97) を上回っている。

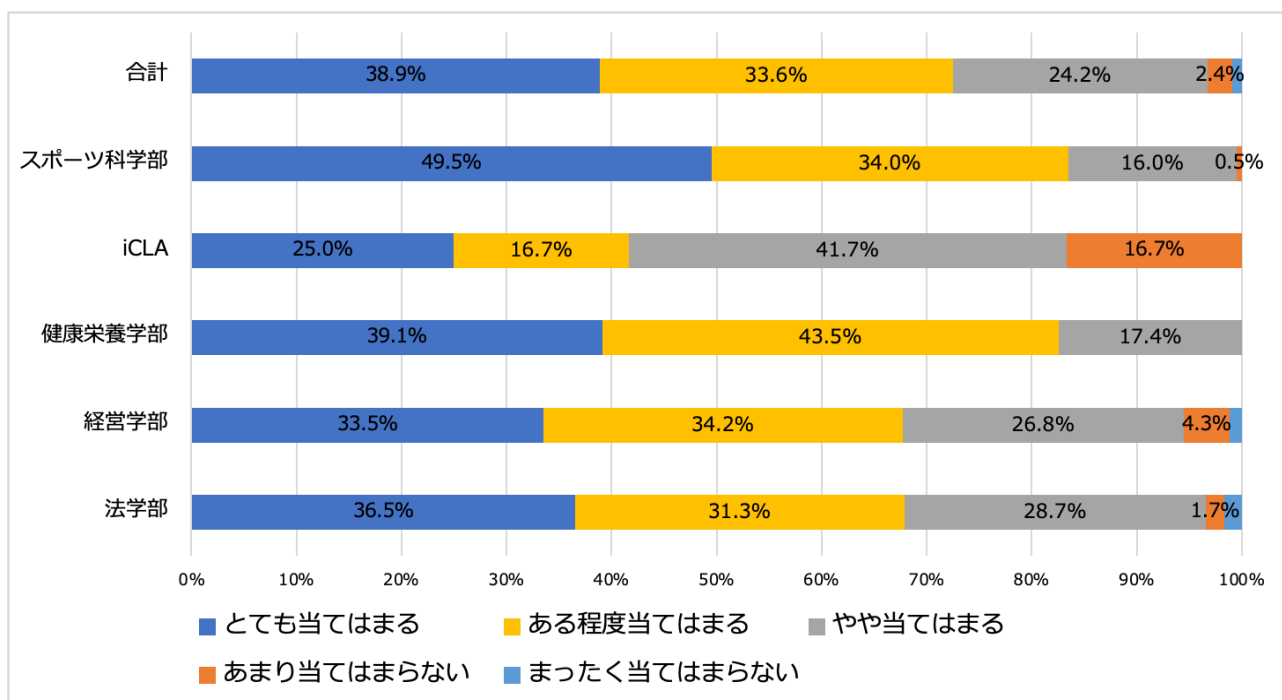
このように、2025年度においても、複数のDP項目においてスポーツ科学部の学生が他学部 (特に法学部・経営学部) と比較してやや高い到達度を示している点は、2024年度と同様の傾向である。一方で、健康栄養学部も全体的に高い平均値 (M=4.13~4.28) を示しており、特に安定した達成度が確認される。また、国際リベラルアーツ学部では一部項目において平均値がやや低い (M=3.58など) もの、標準偏差が比較的大きいことから、サンプルの規模と学生間のばらつきが影響している可能性が考えられる。

これらの結果から、特定のDP項目における学生の到達度には学部間で一定の差が認められるものの、その差は全体的に見て限定的であり、顕著な格差があるとは言い切れない。

第4部 大学学習全体の有用性について

本学での学習全体が「自分の目標を見つけること」や「自分が打ち込みたいことを見つけるきっかけとなったか」という観点から、本学の教育（学習全体）の有用性を卒業生に尋ねた結果、「当てはまる」「やや当てはまる」との回答を合算したところ、約7割の卒業生が本学の教育に対して肯定的に評価していることがわかった。

(1) 自分の目標を見つけるきっかけになったことから見る大学教育の有用性



注：カイ2乗検定 $p < 0.001$

図4 大学の授業や活動は、自分の目標を見つけるきっかけになった

● 全学部で見た大学学習全体の影響（図4）

本学での学習（授業や活動等）は、「自分の目標を見つけるきっかけになったか」を尋ねたところ、「とても当てはまる」（38.9%）および「ある程度当てはまる」（33.6%）を合わせた肯定的回答は72.5%となり、約7割の卒業生が明確に肯定的な評価を示している。さらに、「やや当てはまる」（24.2%）も含めると、大多数の学生が本学での学習が目標形成に一定程度寄与したと捉えており、大学教育の有用性は全体として高い水準にあるといえ

る。2024年度（77.1%）と比較すると、肯定的回答はやや低下しているものの、引き続き安定した評価が維持されている。

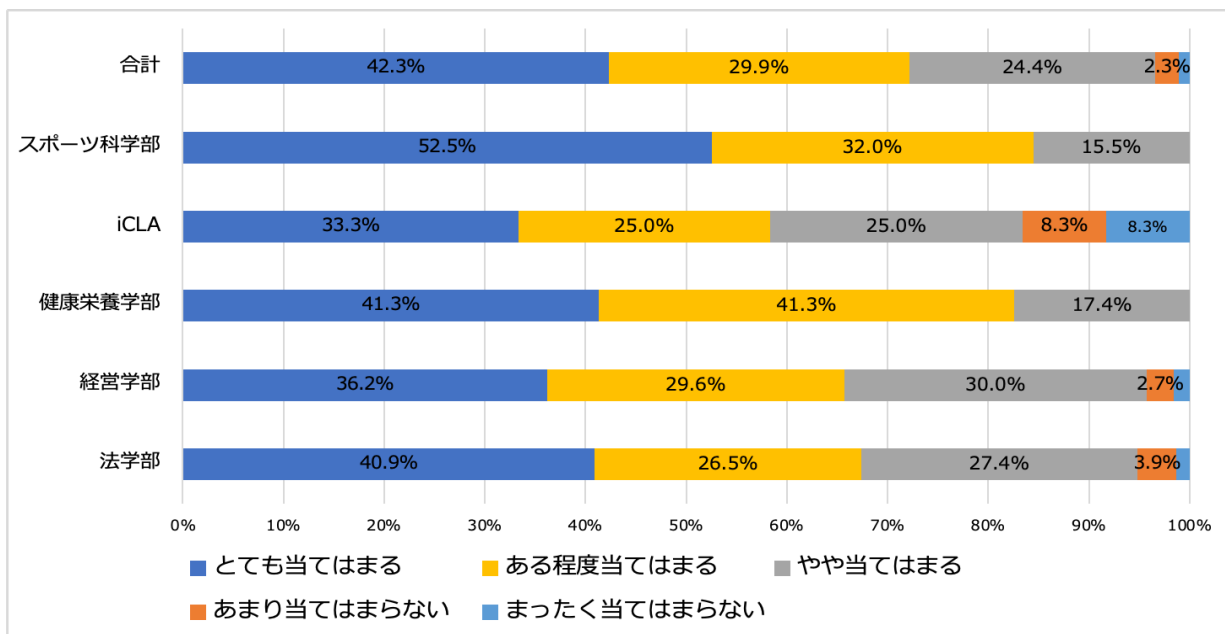
● **学部別に見た大学での学習の影響（図4参照）**

学部別による差の有無を検証するために、カイ二乗検定を実施した結果、統計的に有意な差が確認された ($\chi^2=44.553, df=16, p<.001$)。

学部別に見ると、スポーツ科学部では「とても当てはまる」が49.5%と最も高く、学生が明確に目標を見出している傾向が強い。また、健康栄養学部においても「ある程度当てはまる」（43.5%）と「とても当てはまる」（39.1%）がともに高く、安定して肯定的評価が得られている。

法学部および経営学部においても、「とても当てはまる」「ある程度当てはまる」を合わせた肯定的回答はそれぞれ67.8%、67.7%と一定の水準に達しており、いずれの学部においても学生の目標形成に対する教育効果が確認される。また、iCLAにおいても「やや当てはまる」以上の回答が大半を占めており、多様な学習経験を通じて、学生の目標形成に一定の影響を与えていることがうかがえる。

(2) 自分が打ち込みたいことから見る大学教育の有用性



注：カイ二乗検定 p<.001

図5 大学の授業や活動は、自分が打ち込みたいことを見つけるきっかけになった

● 全学部で見た大学学習全体の影響（図5参照）

本学での学習全体（授業や活動等）が「自分が打ち込みたいことを見つけるきっかけになったか」という質問に対して、「とても当てはまる」（42.3%）、「ある程度当てはまる」（29.9%）を合わせた肯定的回答は72.2%となる。2024年度と比較すると、肯定的回答はやや低下しているものの、依然として高い水準を維持している。

一方で、「やや当てはまる」（24.4%）の割合も一定程度存在している。この「やや当てはまる」は、一定の効果は認められるものの、十分に実感されているとは言い切れない中間的評価であり、教育効果のさらなる向上に向けた改善の余地を示唆するものと考えられる。

● 学部別に見た大学での学習の影響（図5参照）

学部別の分析では、カイ二乗検定の結果、統計的に有意な差が確認された（ $\chi^2=41.969$, $df=16$, $p<.001$ ）。スポーツ科学部では「とても当てはまる」（52.5%）の割合が高く、肯定的評価が強い。また、健康栄養学部では「ある程度当てはまる」「とても当てはまる」がそれぞれ41.3%と高く、肯定的評価が非常に強いことが特徴的である。特に「やや当てはまる」（17.4%）の割合が他学部と比較して低いことから、学生が学習の意義や自己の関心形成について、より明確に実感している可能性が示唆される。

一方で、経営学部（30.0%）や法学部（27.4%）では「やや当てはまる」の割合が比較的高く、一定の効果は認めつつも、学生の関心形成を十分に促しきれていない可能性が示唆される。また、iCLAでは否定的回答の割合が相対的に高く、評価のばらつきが見られる点も特徴的である。

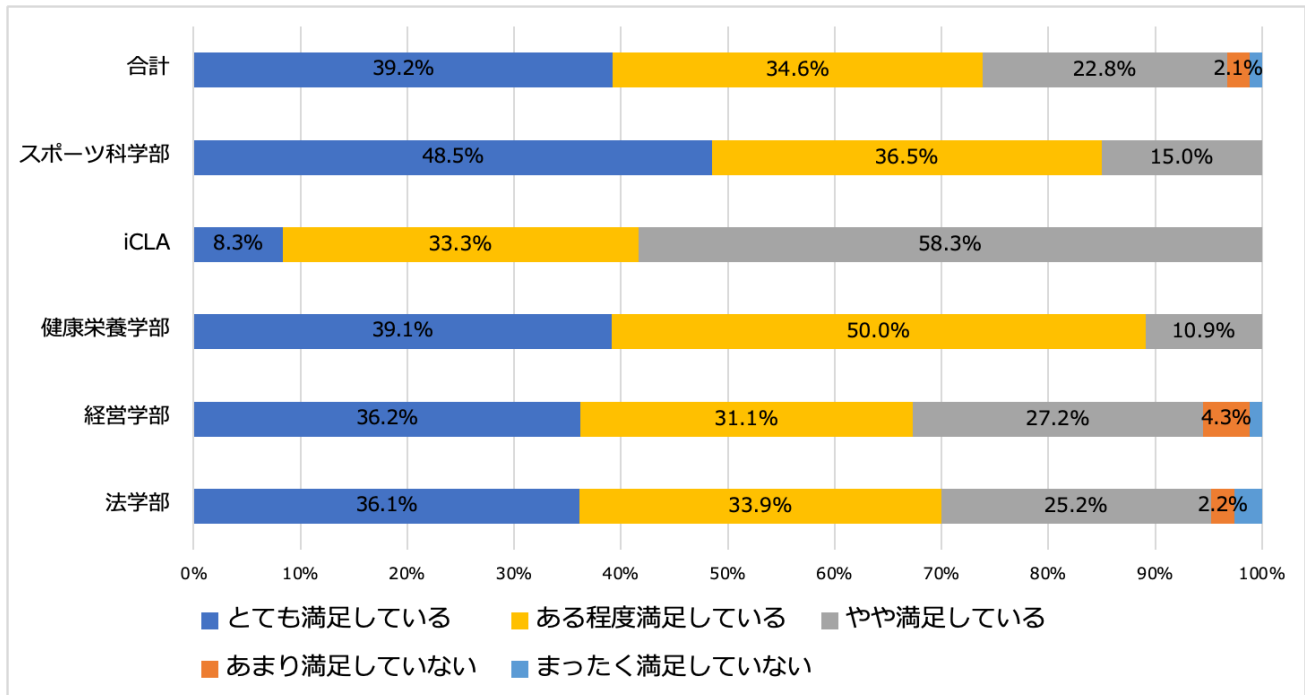
第5部 本学の総合評価について

(1) 大学教育への満足度（図6参照）

● 全体の状況

図6に示すように、卒業生による大学教育の満足度は全体として高く、「ある程度満足している」（34.6%）および「とても満足している」（39.2%）を合わせた満足層は73.8%に達している。一方で、「やや満足している」が22.8%を占めており、一定の評価は得られ

ているものの、さらなる質的向上の余地が存在することが示唆される。



注：カイ2乗検定 $p < .001$

図6 卒業生から見た大学教育の満足度（全体と学部別）

● 学部別の状況

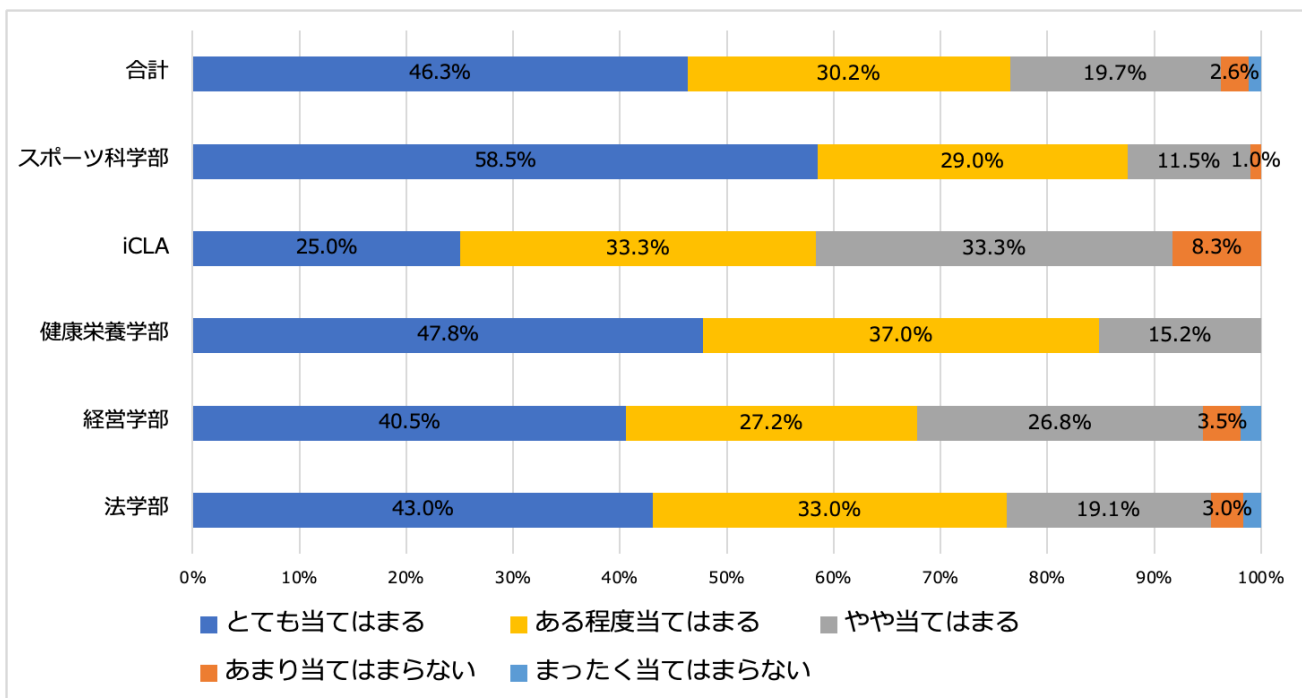
なお、カイ二乗検定の結果、満足度の分布は学部間で統計的に有意に異なることが確認された ($\chi^2 = 48.271, p < .001$)。学部別に見ると、満足度の分布には明確な差異が認められる。まず、スポーツ科学部では「とても満足している」が48.5%と最も高く、「ある程度満足している」と合わせて高い満足度が確認されることから、教育内容や学習経験に対する評価が高い水準にあるといえる。同様に、健康栄養学部においても「ある程度満足している」が50.0%、「とても満足している」が39.1%と、不満回答が見られず、安定して高い満足度が示されている。

一方、法学部および経営学部では、「やや満足している」の割合がそれぞれ25.2%、27.2%と比較的高く、「とても満足している」の割合も一定程度確保されているものの、不満回答も一部見られる。このことから、全体として一定の評価は得ているものの、教育内容や学習成果に対する評価にばらつきが存在し、満足度のさらなる向上に向けた改善の余地があると考えられる。

さらに、iCLAにおいては「やや満足している」が58.3%と過半数を占め、「とても満足している」は8.3%にとどまっている。この結果は、不満が顕著に高いわけではないものの、満足度が中程度に集中していることを示しており、教育内容に対する一定の評価はある一方で、期待水準との乖離や学修成果の実感の弱さなどが影響している可能性が考えられる。

以上より、本学の教育は全体として高い評価を得ている一方で、学部ごとに満足度の構造が異なっており、特に「やや満足している」層の上位満足への転換を意識した教育改善が今後の課題であるといえる。ただし、一部の学部ではサンプル数が限られているため、結果の解釈にあたっては一定の留意が必要である。

(2) 山梨学院大学に入学してよかったと感じているか



注：カイ2乗検定 $p < .001$

図6 卒業生から見た本学に入学してよかったとの肯定度（全体と学部別）

● 全体の状況

「山梨学院大学に入学してよかったと感じているか」について、「とても当てはまる」は46.3%、「ある程度当てはまる」は30.2%であり、両者を合わせると76.5%となった。全体として、卒業生の約4人に3人が本学への入学を肯定的に評価していることが確認された。

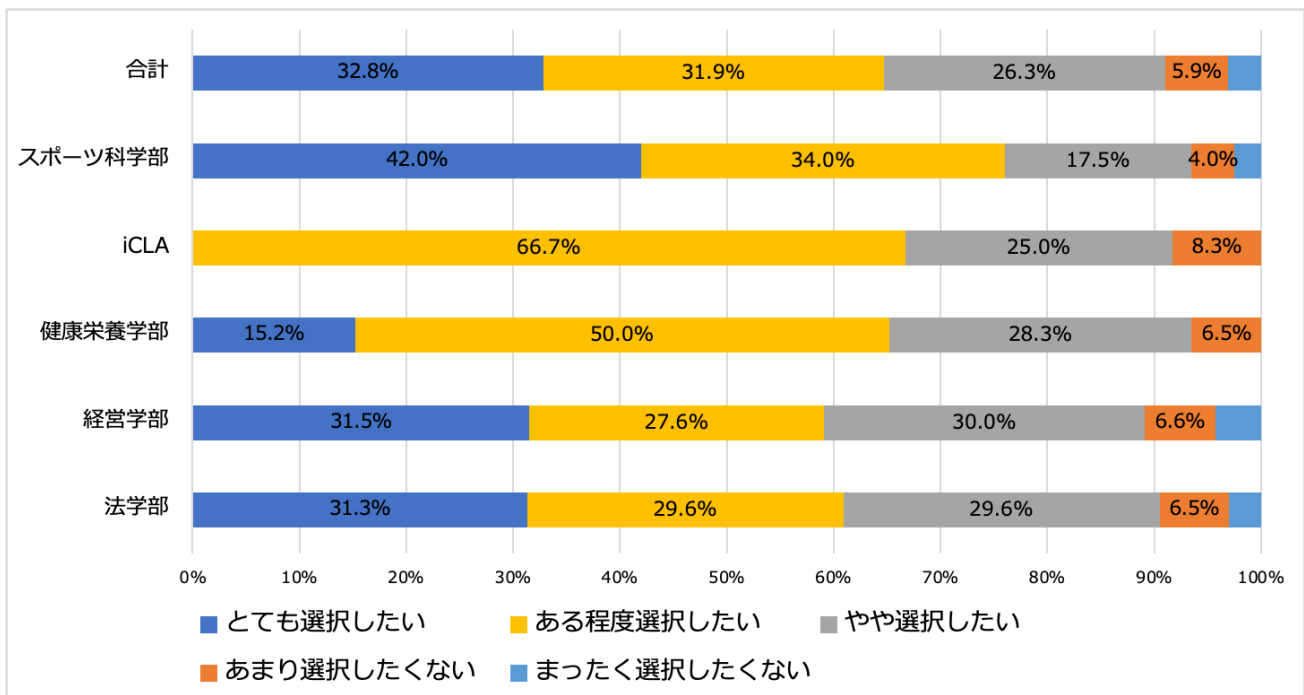
● 学部別の状況

カイ二乗検定の結果、学部間の回答傾向には統計的に有意な差が確認された ($\chi^2=38.282$, $df=16$, $p=.001$)。学部別に見ると、スポーツ科学部では「とても当てはまる」が58.5%と最も高く、明確な肯定的評価が示されている。次いで、健康栄養学部でも「とても当てはまる」が47.8%、「ある程度当てはまる」が37.0%であり、合計84.8%と高い水準にある。法学部も両者を合わせて76.0%となっており、全体平均に近い肯定的評価が見られる。

一方、経営学部では「とても当てはまる」「ある程度当てはまる」の合計が67.7%であり、一定の肯定的評価は得られているものの、「やや当てはまる」も26.8%と比較的高い。iCLAについても「やや当てはまる」が33.3%となっており、評価が中間的にとどまる学生が一定数見られる。

以上より、本学への入学満足度は全体として高い水準にある一方で、学部によって評価の分布には違いが見られる。特に「やや当てはまる」の割合が相対的に高い学部では、学生がより明確に「入学してよかった」と実感できるよう、学習経験や学生支援のさらなる充実が求められる。

(3) 本学を再選択したいか（大学選択・投資肯定度）



注：カイ二乗検定 $p<.005$

図7 本学を再選択したいか（大学選択・投資肯定度）（全体と学部別）

● 全体の状況

「もしも入学前に戻れるなら、もう一度本学を選択したいと思うか」について、「とても選択したい」は32.8%、「ある程度選択したい」は31.9%であり、両者を合わせた肯定的回答は64.7%となった。

全体として、約6割強の卒業生が本学への再選択意向を示しており、一定の評価が得られている。一方で、「やや選択したい」が26.3%と比較的高く、一定の肯定的評価は示しつつも、強い再選択意向にまでは至っていない層も一定程度存在している。

● 学部別の状況

カイ二乗検定の結果、学部間の回答傾向には統計的に有意な差が確認された ($\chi^2=38.282$, $df=16$, $p=.001$)。

学部別に見ると、スポーツ科学部では「とても選択したい」が42.0%と最も高く、加えて「ある程度選択したい」も34.0%と高水準であり、再選択意向が比較的強い傾向が見られる。

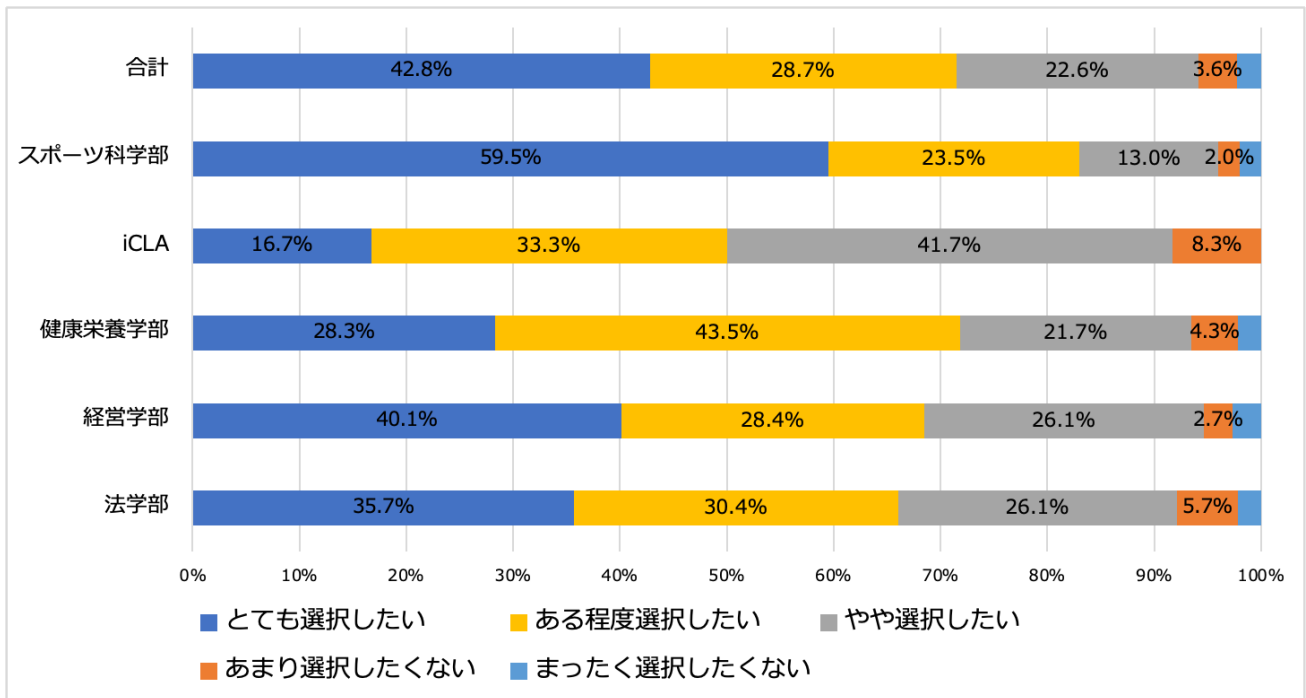
法学部および経営学部では、「とても選択したい」と「ある程度選択したい」を合わせた割合はそれぞれ60%前後となっており、一定の評価は得られているものの、「やや選択したい」(約30%)の割合も高く、評価が中間的に分布している。

健康栄養学部では「ある程度選択したい」が50.0%と最も高く、全体としては肯定的評価が中心である一方、「とても選択したい」は15.2%にとどまっており、強い再選択意向はやや限定的である。

また、iCLAでは「やや選択したい」が66.7%と最も高く、他学部と比較して強い肯定的評価が少なく、中間的な評価に集中している点が特徴である。

以上より、本学に対する再選択意向は全体として一定の水準にあるものの、学部によって評価の分布には違いが見られる。特に「やや選択したい」の割合が比較的高いことから、学生は本学での経験を一定程度肯定的に捉えつつも、強い再選択意向に至るにはさらなる価値実感が必要である可能性が示唆される。今後は、学修成果や学生経験の質を高めるとともに、大学での学びが進路や自己実現にどのように結びついたかを実感できる支援の強化が重要である。

(4) 同じ学部を再選択したいか（学部選択・投資肯定度）



注：カイ2乗検定 $p < .001$

図8 同じ学部を再選択したいか（大学選択・投資肯定度）（全体と学部別）

● 全体の状況

「もしも入学前に戻れるなら、もう一度同じ学部を選択したいと思うか」について、「とても選択したい」は42.8%、「ある程度選択したい」は28.7%であり、両者を合わせた肯定的回答は71.5%となった。

全体として、約7割の卒業生が自身の学部選択に対して肯定的に評価していることが確認された。一方で、「やや選択したい」は22.6%となっており、一定の評価は示されているものの、強い肯定にまでは至っていない層も一定程度存在している。

● 学部別の状況

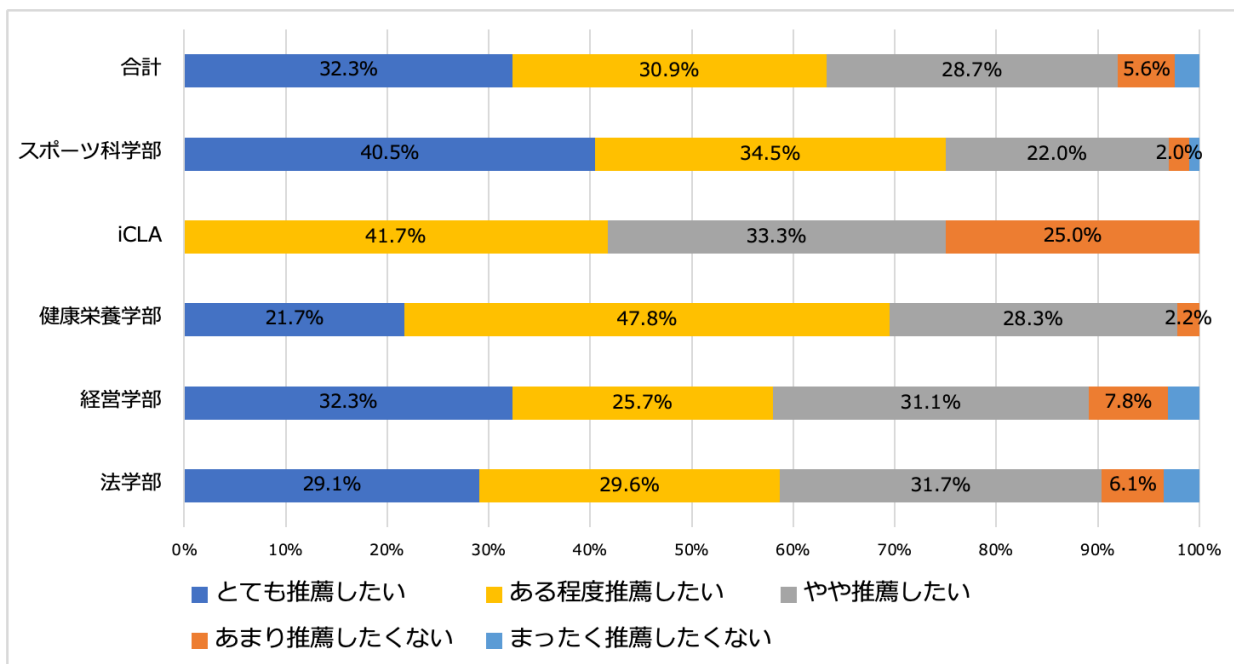
カイ二乗検定の結果、学部間の回答傾向には統計的に有意な差が確認された ($\chi^2=44.873$, $df=16$, $p < .001$)。学部別に見ると、スポーツ科学部では「とても選択したい」が59.5%と最も高く、明確に高い満足度が示されている。経営学部においても「とても選択したい」が40.1%と比較的高く、一定の肯定的評価が確認される。

健康栄養学部では「ある程度当てはまる」が43.5%と最も高く、「とても選択したい」は28.3%となっており、全体としては肯定的評価が多いものの、強い肯定はやや抑えられた傾向が見られる。

法学部では「やや選択したい」が26.1%と相対的に高く、評価が中間的に分布している。また、iCLAでは「やや選択したい」が41.7%と最も高く、「とても選択したい」は16.7%にとどまっており、他学部と比較して回答の分布に特徴が見られる。

以上より、学部選択に対する肯定度は全体として一定の水準にあるものの、学部によって評価の分布に違いが見られる。特に中間的評価の割合が比較的高い学部では、学生がより明確に自身の選択に納得できるよう、学習経験や進路との接続の在り方について継続的な検討が求められる。

(5) 本学への推薦意向（大学選択・投資肯定度）



注：カイ2乗検定 $p < .001$

図9 本学への推薦意向（大学選択・投資肯定度）（全体と学部別）

● 全体の状況

「本学への進学を他の人に推薦したいと思うか」について、「とても推薦したい」は32.3%、「ある程度推薦したい」は30.9%であり、両者を合わせた肯定的回答は63.2%となった。

全体として、約6割の卒業生が本学を他者に推薦したいと考えており、一定の評価が得られている。一方で、「やや推薦したい」が28.7%と比較的高く、一定の肯定的評価は示されているものの、積極的な推薦にまでは至っていない層も一定程度存在している。

● 学部別の状況

カイ二乗検定の結果、学部間の回答傾向には統計的に有意な差が確認された ($\chi^2=43.255$, $df=16$, $p<.001$)。

学部別に見ると、スポーツ科学部では「とても推薦したい」が40.5%と最も高く、「ある程度推薦したい」(34.5%)と合わせて高い推薦意向が確認される。

経営学部では「とても推薦したい」が32.3%、法学部では29.1%となっており、いずれも一定の肯定的評価が見られるが、「やや推薦したい」の割合もそれぞれ31%前後と高く、評価が中間層に分布している。

健康栄養学部では「ある程度推薦したい」が47.8%と最も高く、全体として肯定的評価は示されているものの、「とても推薦したい」は21.7%にとどまっており、積極的な推薦意向はやや限定的である。

iCLAでは「ある程度推薦したい」が41.7%、「やや推薦したい」が33.3%、「あまり推薦したい」が25.0%と、他学部と比較して評価のばらつきが大きい点が特徴的である。

以上より、本学に対する推薦意向は全体として一定の水準にあるものの、学部間で評価の分布に違いが見られる。特に「やや推薦したい」の割合が高いことから、学生は本学での経験を一定程度肯定的に捉えているものの、積極的に他者へ推薦する水準には至っていない層も一定程度存在している。

今後は、学習成果や学生経験の質を高めるとともに、「他者に勧めたい」と感じられるような大学としての魅力や価値の明確化を図ることが重要である。